

水牛通信

人はたがやす

水牛はたがやす

稲は音もなく育つ

なまえがかわるとき 2

料理がすべて 田川律 18

如月小春 楠原理枝子 志沢小夜子

津野海太郎 平野公子 八巻美恵

東北の神武たち・その後 鎌田慧 22

松崎町訪問記

伊豆の長八美術館など 津野海太郎 24

キリコのコリクツ 玖保キリコ 13

「カフカ」ノート 高橋悠治 28

山がない(1) 卷上公一 16

走る・その九 デイヴィッド・グッドマン 30

なまえがかわるとき

八巻 何号か前に「本橋先生の整理学」
っていうのがあったの覚えてるでしょ。
あのとき「本橋夫人」として登場して
たのが、楠原さんなんですけども、彼
女は、なんだっけ、運動の正式な名前
なんていうの？

楠原 今は全然やってないんだけど、
「結婚改姓に反対する会」っていうの
ね。友だちとモヤモヤと署名運動なん
かやって、土井たか子さんのところへ
上程したけど、なかなかね、むくわれ
ないんだよね。やってたのは十一年前
当時そういうことに意識あるひとって
すくなかったでしょ。今でこそすごく
多いけど。それとは別に、友だちが離
婚しても苗字を変えないですむ法改正
ってのをやって、すぐみのっちゃった
わけね。それはすごい必然性があるで
しょ。結婚して、社会に出て名が売れ
て、そのあと離婚をして、苗字が変わ
るとすごい損するっていう、その話は

如月小春 楠原理枝子 志沢小夜子 津野海太郎 平野公子 八巻美恵

はっきりしてる。だからそっちの運動
はすぐみのっちゃったんだけど、こっ
ちはみられないしね、内部分裂なんて
おそまつもあって、すぐやめちゃった
わけ。

八巻 という人をつかまえて「本橋夫
人」というふうに、津野さんが書いて
しまった。

津野 はい。経過を言っておくと、本
橋くんの家で、本橋くんはカメラマン
だけでも、話したのをそのまんまテー
プおこして、水牛ののっけちゃおうっ
て言って、お酒のみながら話してたの
ね。雪の日の朝。そしたら結局その整
理学の話になってきて、本橋くんは魚
河岸に写真をとりに行ったまま帰って
こないんで、彼女がいろいろ話をして
てくれたのね。で、翌日までにやらな
くちゃいけないんで、その晩、すぐお
こしてさ。ぼく、楠原さんは前から知
ってるんだけど、その前から楠田枝理

子も知っててさ、ふたりの名前がまぎ
ってきて「りえ」か「えり」かわかん
なくなってきたの。どっちだっけなあ、
と思って、えい、しょうがないってい
うんで「本橋夫人」という、ある種
なけば架空の人物をつくったの。

楠原 あれは架空だったのか。
津野 それで、まあ、いろいろおしか
りを受けまして。

八巻 ですから、そういうテーマでい
ちどしゃべればいいんじゃないかとい
うことになってね。

楠原 ああいうふうに書きちゃったの
は、津野さんにとってわたしの存在が
ひじょうに希薄だったんだらうなって
思ったりして。

津野 そんなことはないよ。

楠原 だって、もっと人格的にかかわ
ってれば、「本橋夫人」とは書かな
かったんじゃないかな。

津野 というふうな次第なわけな。

八巻 今は入籍してるんですか。

楠原 子どもができて、日とってしち
ゃったのね。あんまりしなくていいな
と思っただけど、むこうのほうがす
ごい熱心でね。必死のおもいで彼は前
のひととの離婚届もらったあとですぐ
入れたがったっていうこともあったし、
もう破裂しそうなおなかしてたんでね、
子どもが生きにくいのもたいへんかな
あとと思って。とりあえず入れちゃって、
あとで子どもに選択させるのもいい方
法かなとも思っただけだった。その
ままだまはあまんじてる。美恵さんも
入ってるの？

八巻 入ってます。

楠原 あたし、本名は楠原で、戸籍名
は公文書に使う、それこそペンネーム
という感じでやってはいるんだけど。
志沢 あたしなんか結婚したときジャ
ンケンしたのよ。結婚するんで籍をど
うしようかっていうんで、じゃジャン

ケンで決めようっていうふうに決めた。で、朝、届けに行く日にジャンケンしたの。ほんとに見事にあたしが負けたの。しょうがなく岡に入ったんだけど、そうじゃなければ志沢でもよかったわけ。まあ新しくつくるといいうのもいいねとは言ってたんだけど。

津野 「岡」なんて明るくていい名前じゃないか、じつに。

八巻 あたらしい名前ってつくれるの？

志沢 つくれるの。

平野 名前も？

志沢 苗字。

楠原 名前を変えるのはけっこう大変なのよ、理由づけがね。

八巻 ジャンケンしたのは何年前？

志沢 十二年前ぐらい。

八巻 じゃあ楠原さんが運動してたのとおんなじぐらいのときね。

志沢 まわりにはあんまりいなかった

わね。

楠原 めずらしいって言われてね。どうしてそんなにだんなさまを大切にする意識がないの、とかね、ずいぶん罵倒されたわよ、ほうぼうで。

八巻 そのときそういうことがあったんですか？ だんなさまが？

楠原 あったの。今は二回目だから。

志沢 二度目同士なんだよね。

楠原 そうなの。十一年前。結婚てのはあんまりしたくなかったんだけど、まわりがそういう雰囲気になって、彼も一応結婚したいって言ったわけね。

ジャンケンで決めようって言ったたら、それを聞いていたむこうの親が、顔真赤にして怒ってね、うちの息子が負けたらどうするんだって。万が一うちの息子が負けたらきみの苗字になる。したらうちの息子は後指さされるようになる、なにか事情があるんじゃないかって言われるって。それでずいぶん

相手の親ともめたんだけど。で偽装的にそのとき一時籍入れて、すぐ抜いちゃったわけ。

志沢 偽装か。たいへんね。

楠原 入れるときって大体99パーセントぐらいの女性が相手の苗字になっちゃうでしょ。法律にはどっちになってもいいって書いてあるのにそうなのちゃうってことが、つまらない話だなあと思って。それでハタと気がついたらまわりにそういう意識もってるひとがいたんで、じゃいっしょに少しのろし上げようか、とぼちぼち。

如月 でもわたしのまわりなんか入籍はしてるんだらうけど、かならず別な名前できますよ。まあ、ちゃんとしたんさんの名前になりましたっていうのも多いけども、ここ何回か来たハガキはみんなむかしどおりの名前で呼んでくださいって。すごく多くなってきたみたい。

津野 名前ってのは、親の方で、パランス考えてつけてんだろ、当然。それが突如、上がガラッと変わるもんな。

平野 ねえ、名前のことなの？ 籍を入れる入れないのことなの？ 名前は自分でこう呼んでくださいって言えば周りの人はそれになれれば呼ぶわけだから。

楠原 でも、勤めてると、やっぱりいろいろな問題が起こってきてね。お給料の明細とかが入籍した名前になってくると、周りも自然にそれで呼びだしてきちゃう。まあその当時勤めてたっていうのもあるんだけど。

志沢 あたしは職場には結婚しましたって一応届けはしたの。届けをしないと税金の問題とかあるからね。でもふつうは志沢でいきたいんですというふうにも届けたの。で、いいです、ということになった。うちは全国の組織だからそこでえらい人が、一応結婚はし

てて本名は岡というんですが、本人は仕事上は志沢でやりたいと言ってるのでこれでいきます、と紹介してくれたの。それがわりとよくてね。うちはあたしともうひとりそういう人がいるんだけどね。ときどき「岡さん」て呼ばれるんだけど、そう呼ばれたときは返事しないようにしてます。

楠原 わたしも知らん顔しちゃおうかしら。

平野 あたしはいろんな名前があったほうがいいと思うわ。いろんなときに付き合ったひとがその名前で呼んでくれれば、「平野夫人」でもいい。前から付き合ったひとは前の名前で呼んでいいわ。子どもともだちは「なんとかちゃんのおかあさん」でしょ。だから女の人のほうがいっぱい名前があってすごいいと思う。

楠原 いろんな面の付き合いがあるってことよな。

平野 あたしはこうなんですっていうふうに、自分で決めないで、通り名っていうのはいっぱいあったほうがいいと思うのね。

如月 あたしいっぱいあるの。

志沢 いっぱいあるのいいね。

平野 いっぱいあると、その名前のように自分もあるわけよな。

津野 そうかい。じゃ、ぼくがきみを森田さんっていうときは、やっぱり違う感じでぼくとの関係ができるということか。

平野 そう、そうなの。近くにいるひとは、平野さんちのお母さんとかおかみさんとかって思ってるわけじゃない。それはそれ用に付き合うわけよ。

楠原 そのタイプの顔になるのね。

平野 うちなんか子どもが三人いるから、三人とも別々の学校行ったらそれ用のおかあさんてのがあるわけよ。

津野 昆虫みたいにいるる姿態で

るわけね。

平野 だからたくさん名前もってるひとが一番おもしろいんじゃないかと思っただの。籍の話じゃなくて、いまは名前のことだけどね。

如月 名前変えて人格変わったもん。全員 あっはははは。

津野 ほんとかねえ。

如月 うん。あ、いまは如月さんやってるんだって思うときってあるんです。そういうときは全然違っちゃうの。もうだいたい慣れたけど、最初はね。

平野 だから芸名つければいいのよ。

八巻 芸名じゃなくても、「高橋さん」って呼ばれたらだって、違っちゃうじゃない。

平野 そうでしょ？ それはあたしたちが知らないだけよ。あたしたちは美恵っていうふうにつき合ってるんだから。

津野 ぼくの如月さんの名前について

の推測っていうのは、正しいか正しくないかわかんないけど、如月っていうのは二月でしょ。小春っていうのは小春日和の小春だから十月でしょ。二月と十月ですと一年でしょ。で、わたしは一年全部だ、わたしは全世界だっていう名前なんじゃないかっていう、予測なんだけど。

如月 そ、そんな派手なもんじゃないんです。自分で付けたんじゃないかってお友だちがつけてくれて、冗談だったんです。ある友だちは八月生まれだから「葉月なんか」とか付けて遊んでてそれが名前になっちゃって。だから自分で冗談で付けた名前だっていう意識がずうっと残ってて、非常に公式なマジな場でね、こちら如月小春さんです、なんて言われると、ほかの人はきちんとした名前あるのに、あたしだけこういうとこで冗談やっけていいんだらうかって、すごくそういう気がする

わけ。でも逆にいうとあたし本名がほんとに名前っぽい名前。

志沢 なんていうの？

如月 伊藤正子っていうの。

全員 まあーっ。

如月 ねっ。落差がすごくあるわけ。だから名前で冗談やっちゃったから、もうなにやってもいいって気がして、本名るときは道がふみはずせなくて、如月小春だとなにやってもいいっていう感じになっちゃって、すごく便利。人格がバーンとひらっちゃって。

全員 いいねえ。いい。うらやましい。如月 名前をおもちのようにならなくて。たいしたもんじゃなくなって感じがあるから。

津野 だってきみの本名知ってるひとって昔の友だちとか家族しかいないわけでしょ。

如月 そう。

津野 いま付き合ってるひとのほとん

どは本名なんて全然知らないわけでしょ？ それは、すごいね。たとえば、ぼくがいくら今から名前を変えましたって言ってもさ、そんなにショックな変化にひとが見てくれないから、結局自分も変われないな。

平野 状況が変われば変わるのよね。

志沢 結婚してみたら？

如月 でも名前が状況変えてくれましたもん、あたしの場合。

八巻 それが先よね、名前が先よ。だから逆にいえば、名前を変えたくないっていうのは、そういうこともあると思うのね。結婚して名前が変わっちゃうと別の人格になるっていう感じがあるからさ。

平野 高校生の娘がいるとね、楠原さんがおっしゃるようなことは当たり前みたいね、感覚として。結婚したって自分の名前変えようなんて全然思っていないみたい。今はまだ実際にそういう

話があるわけじゃないけど、なるんじゃない？ だんだん。

楠原 なるわけね、だんだんね、きっとね。

平野 逆にさ、そういうのがあんまりいっぱいになると、籍を入れてほしいっていう運動も出てくるかもしれないわね。

楠原 そうね。あたしが運動やってるときにも、武田清子さんてICUの先生やってるひとで、彼女もダンナとは別の苗字名乗ってたんだけどね、地方なんかだとよけい女性の立場が低いっていうの、あるでしょ。そういう人のことも考えると、別姓っていうのは全国的に考えて死んでるんじゃないかって。だから片っぱの苗字になるのも両方の苗字になるのも、どっちでも本人たちが選択できるように法改正をしようとしたのね。

平野 そうなるんじゃないかしら。

津野 ただ、女性が自分の苗字にこだわるって言っても、その名前は父親の苗字だろ。だから、それをさかのぼればさ。

楠原 さかのぼればおかしな話なんだけれども、その名前での自分の人格形成してきちゃったっていう歴史があるわけだから、そこからまたあらたにくつがえすのはしんどいことであってね。

津野 ほんととはだからそのときにその二つのなかから選ばないで「如月小春」になっちゃうとかさ。

全員 そうね、そういうのがいいね。津野 それで一生に三度くらい名前が変えられるとかさ。

平野 結婚でじゃなくてね。

楠原 その名前で通った仕事してるひとは、仕事の関係や人間関係で、名前をチェンジするのがめんどくさいでしょ。だから名前は変えなくていいよ。うな方向でって運動やっただけです

ね。ほんとは変えたって、自分で選択
できればいいんだけどね。

平野 税務署やなんかは本名？

如月 うん。この前ね、NHKの集金
の人が来て、すいません、如月さんい
ますかっていうから、はい、わたしで
すけどって言ったら、払ってください
って言う。あのう、あたし銀行引き落
としにしていますけど。いやあ、伊藤さ
んからはいただいてますけど、如月さ
んからはいただいてませんって言うから
同じ人ですって言ったら、すごい不可
解な顔して、こっちも不愉快だったか
らボタンとドアを閉めた。そういうの
うるさいんですよ。住友のVISAっ
ていうカードあるでしょ。あれがほし
いと思って申し込んだら、本名の口座
じゃないといけないって言われたの。
で、あたしは本名はほとんど収入がな
いの。如月宛にカードに入れ入れて
いっぱい送ってくるから、こっちも入

ってやろうって思ったのに、本名じゃ
だめだって言う。実は如月小春なんて
すけどって言ったら、今度は、ぜひ入
ってくださいって言うんで、いいえ、
入りませんって怒ったの。

津野 なんかこだわりがあるな。

如月 逆にそういうふうに見られるの
がね、おもしろくないから。

平野 平野さんも「平野甲賀」はペン
ネームで、戸籍名はあの字のままタ
カヨシって読むのよね。だから、税務
署から還付金とか振り込まれるのはタ
カヨシじゃなきゃならないわけ。漢字
は同じですからって言うのに、やっぱ
り別に作んなきゃなんないの口座を。
如月 そう。それだけ別なんですよ。

平野 ね。漢字は同じですからって言
ったら、コンピューターは漢字はわか
りません、なんて。
如月 うん。すぐくうるさいの。だか

ら本名の税務署のための口座と如月の
口座と別にあるの。

津野 如月小春って書いて、これはイ
トウマサコって読みますってわけには
……。

如月 そう言ってみようかしら。

津野 きみは「平野さん」って言うじゃ
ないタカヨシくんのことを。それはば
くたちの中から平野さんって言うてる
の？ いつも平野さんなの？

平野 そうね。あれは「平野さん」と
しか思えない。はじめから「平野さん」
だったから。

八巻 そりゃそうでしょう。あたしだ
って、あのひとは「平野さん」としか
思えないよ。

平野 あたしが「平野さん」って言うの
は全部通用するわよ、親にも兄弟にも
先生にも。

志沢 だから長い間そうやって呼んで
るのよね。

津野 きみなんかどうするの？ そう
いうとき。

楠原 「本橋さん」。

津野 ぜんぶ「本橋さん」？

楠原 彼の母親がいるときは、「成一
さん」って言って気を使ってる。

津野 美恵は「悠治」って言うよな。

八巻 うん。でも、子どもの学校行っ
たときなんか困るの。みんな「主人」
て言うのよね。学校で「悠治」って言
うのはおかしいだろうと思うんだけど
ね、でもあたしはどうしても言えない
の、シュジンとは。

平野 そうね。

楠原 あたしもちよっとぞっとしちゃう。
う。

志沢 あたし、「夫は」って言うてる。

八巻 「夫」は言って言えないことは
ないけど、やっぱり言いつらいし、書
き言葉のような気がするから。

楠原 むかしからいうのは苗字を呼び

すてにして、「うちの本橋」っていう
ふうにな、それは使うわね。そういやじ
ゃない。

八巻 「うちの高橋」ねえ。いやじゃ
ないの？ あたし、やだわ、なんか。

楠原 「うちの」っていうのはちょっ
とやだなと思うけど、「夫」とか「主
人」よりいいと思う。

平野 あたし、父兄会でバートと話し
てるうちに、「平野さんが、平野さん
が」なんて言っちゃって、平野さんて
だれですかって言われたことある。

津野 あなたも平野さんなのに。

平野 「だれだれの父親が」って言う
のよね。「葉弥の父親は」って言うで
しょ。

八巻 うん、そうね、学校では「父親」
って言うね、だいたい。

津野 男の側だっとうやあって呼んで
いいかわかんないぜ。

八巻 そうだろうと思うのよ。

津野 女房と言うのか、うちの奥さん、
家内？ 妻？ かみさんて言うのも多
いけど、それもずるいみたいだろ。

楠原 本橋さんは「かみさん」て言っ
てたけど。最近はおたしもしつこく
言うから、「この人は楠原さん」て言
います。彼は、わたしが本橋に変わっ
てうれしいわってなるのを期待してた
んだけど、そうならなかったのね。そ
ういう背景があるから、わたしが「楠
原です」って言うのも、なんとなくそ
ういうのひきずりながら言ってる部分
があってね。彼がそういうとこ、すっ
きり受け止めてくれてたら、わたしも
もうすこし自然に言える部分もあるん
だろうけど。

平野 平野さんなんか籍入れないほう
がいいっていう話は、男はすぐくうれ
しいなって言うてた。

全員 ははは。自由にできるからね。

津野 今となったら、仮にぼくが結婚

するとして、相手が「津野」になるって言うのは、ちょっとだめだね。

楠原 気持わるいでしょ？

津野 もう受け入れられないね。気持わるいよ、やめてくれよって言うふうになっちゃうね。だけど、もっと前だったらわからないよ、うん。

楠原 要するに相手の苗字になっちゃうと、だれその奥さんという補助的な存在に見られちゃうからすごくいやだ。

津野 苗字じゃなくて名前だけは自分しかないものでしょ。そうすると名前の付き合いのほうが無駄というふうになるよな。

楠原 そのほうが自分でも自然よね。

津野 如月さんみたいに作った名前だと「如月」って言ったほうがいいな。「小春ちゃん」なんていったら気持ちわるいもんな。わざとらしいもんな。

如月 テレビのディレクターとかね、

ああいう人って一度会っただけで、小春がよし、って言う。あたし、あれが嫌いで。

津野 困るよな。

如月 でも結婚しようがなにしようが如月小春って名前が一番強くなっちゃうような気がするから、もうひとつ全然別なのつくりたいくらい。うん。強くなりすぎちゃって。たとえば結婚して、結婚式の案内状に本名で相手の人と二人ならべたってだれかわかんないもん、みんな。

八巻 あら、ちがう人と結婚したのね、とかね。

津野 たとえばさ、こんなこといっちゃよくないけど、如月小春って人がだんだん衰えてったとするじゃない、その世界の中でさ、ふるーくなってるって感じ。まあ、かならず来るわけじゃない。そのとき如月小春って名前に節を通し続けるってのは、かなりつら

くなるだろうな。
如月 いや、だからあたし、この芝居の仕事とともに如月小春って名前は滅ぼして、違うところで違う名前が別なこ

とやる！
津野 そうじゃなきゃ如月小春って名前を人に譲るとかさ。そうするとまたその名前が新しくなったりして。

楠原 歌舞伎の世界みたい。

全員 襲名！

津野 おかしなもんだと思うよ。古い団十郎なんて何百年も続いている名前がさ、その瞬間新しくなったりするんだから。如月さん、戸籍上の名前は変わってないの？

如月 結婚したら変わるでしょうね。

津野 入籍するって形になるわけか。

如月 だってそうじゃないとまた同棲してるって書かれるから。

平野 そうすると、もう三つになるじゃない、名前がね。

全員 いいねえ。

如月 でも結婚してもみんな絶対あたしのことは「如月さん」て呼ぶだろうし、全然変わらないうえ。

八巻 NOISEでは「如月」って、みんな呼びすてなのね。

如月 全部呼びすて。

津野 このごろ女性が、たとえば如月さんは「如月が」っていうふうに、キ

リコは「玖保が」っていうふうに言うでしょ、自分のこと。

如月 「如月は」って言いますね、人前で話なんかしていると、使いわけてるかもしれないけど言いますね。

津野 公式な場所だね、それは。

如月 そうですね。

平野 ここで「如月は」とは言わないもんね。

如月 でも「小春はね」とは言えないですよ。

津野 今までの例で言うと、男でそう

言うのは矢沢永吉ぐらいだな。矢野彰子さんにしろ如月さんにしろ玖保キリコさんにしろ、そのあたりからなのかな、自分のことを自分の苗字で言っちゃうとかっていうのは。

平野 高校生の女の子は、そうね。

津野 そうだろ、だからそれは何か意味があるんだよ。

八巻 その前は自分のこと「ぼく」って言う女の子いっぱいいたじゃない。

平野 友だち同士も全部呼びすてですよ。

八巻 そうね、相手のことをね。

如月 仇名みたいな感じで苗字をね。あたしだって、演出するときは、苗字で呼ぶ。男も女も区別つけなくてすむでしょう。それで自分のことは「如月」って言う。

津野 そうか、女性がそういうふうに言うってことは、自分の名前であつたことを苗字に置き換えてるんだ。

平野 男女で「さん」「くん」て区別してないわね。

如月 ぜんぶ呼びすて。どっちか「さん」つけたらぜんぶ「さん」、「くん」つけたらぜんぶ「くん」、まあ日によ

ってちがうけども、区別はつけない。

志沢 それは年上の人もそう？

如月 年上の人は、最初やっぱり「さん」て言うてるけども、だんだいっしょになっちゃう。

津野 鶴見俊輔さんがね、自分の文章書くときは、一切、全部さんづけという決めてしまつて、もうどういう人であれみんな「さん」をつけて、公式な場所では「さん」だけで統一するってのをやってたよね。そうだよ、統一しちゃえばいいんだよね。たしかに使わけると気持ちわるいし、やるのが苦しいもんな、ときどき。

平野 女の子同士で男の子の話するのも呼びすてだから、それが男の子の話

か女の子の話かわかんないの。区別はもうあんまりないみたいね。

津野 そうやってくと、どんどんどん中性的な、男女の性とか上下関係とかの価値感の入らない話法みたいなものが定着してくるのかしら、日本語の世界に。どうですか、如月さん、そこからへんの日本語の問題については。

今は荒々しいよな、そういうの聞いてると。日本語の習慣と全然違うからさ。うまく定着してくると、すごく気持ちいいものになるのかしら。

如月 なんかね、すごく使い分けるみたい。これが女の子しゃべりだなんていうのやってるかと思うと、すごく乱暴になるし、丁寧語は一応使ったりね。あ、男の子は使い分けられないんです。女の子はすごい使い分けるって感じがするな。

津野 じゃあその子たちが大きくなった、全然変わんないじゃない、適応

してっちゃんば。変態少女文字ってのはそうなんだって？ みんな、だいたいい二通り書けるんだって？

八巻 そう、ふつうの字とね。研究してるねえ、津野さん。

津野 そうすると、しゃべり言葉もおんなじようなもんで、大体二通りでできると。

八巻 女の子はさめてる。

平野 あれにかねあう男の子たちってどうやって育てばいいのかしら。

如月 ほんと、若い男の子、適応力なような気がするな、いろんなことに。

津野 でもむかしから20代の男ってのは適応力全然ないよ。大学出たところで男と女と較べたら、むかしから女の方が力あったもん。

志沢 だから押さえつけたのかしら。

津野 30すぎると少し違ってくるんだよね。成熟が遅いよ、男のほうが。性的なことを除けばね。や、性的にもそ

うかもしれないけど。

楠原 20代の男の子ってつまらなかつた。

津野 大学出たときの男と女の力の差ってすごいんじゃない？ 劇団の試験やっただって、歴然としてるでしょ？

如月 うーん、そうね、同じ年令で切ればそうですけどね。だけど、ある程度年令がいったら男の方がおもしろいことがありますね。30過ぎてまでやったら、男の方がおもしろい。20代前半だったら女優の方が絶対おもしろいけども。

津野 それはなんなんだろうね。

八巻 ねえ、話がはずれてきたと思わない？

全員 そうね、ほんと。この続きはテープを止めてからやろうよ。そうしよう、そうしよう。

キリコのコリクツ 玖保キリコ

ふふふと不敵な笑いの私。

玖保はとうとう仕事場を見つけた。た。

長い間「仕事場を捜す。仕事場を捜す」とわめき続けてきたものの、なかなかそれを実行に移すことができなかった私を、「狼少年」と呼ぶ人もあった。

しかし、しかし、もう私はウソツキではない。

契約だって済ませちゃったもんね。らん、らん。

まあ、私がウソツキ呼ばわりされるのも無理はない。

何せ、「仕事場を持つと思うのよね」と人にふれ回るわりには、不動産屋さん巡りをするわけでもなし、アパマン情報を買うわけでもなし、ほんとうに、言ってるだけで何もやっていなかったのである。

実を言えば、

「天から降ってくるように、いい話がふつてくればいいのにな」

と、ぼーっと待っていた節もある。

もちろん、天から仕事部屋が降ってくるわけではない。

やはり、世の中、そう甘くはない。さすがに脳天気な私も、日々増えて

いく資料の山（と書くたいそうなもののように聞こえるが、雑誌やマンガの類にすぎない）に侵食されていく自分の部屋の有様にいたたまれなくなりついに「仕事場探し」を余儀なく実行するに至ったのであった。

母は私の部屋探しにあたって、こう言った。

「じっくり捜さなくてはいけない」

私は母の言葉通り、じっくり、丹念に捜すつもりであった。

大きなお金が動くわけだし、簡単に変えられるものではないので、事を急いではいけない。

そう、自分に言い聞かせた。ところが、思いもかけず、すぐに話が決まってしまった。

西荻窪に部屋を捜しにいった第一日目に部屋を決めてしまったのである。

その日は土曜日であった。その週のウィークデーに、

「捜さなきゃいけないと思うんだけどまだ全然不動産屋にも行っていない」と言った私が、翌週の月曜日にはもう「部屋が決まりました」

と明るい声で報告していたのである。友人、知人は、私の決定のあまりの早さに、ほとんどあきれれていたようだった。

もちろん、あきれる前に、誰もがびっくりしていた。

一番びっくりしたのは松苗さんだと思う。

松苗あけみさんはマンガ家で、私の大好きな作家の一人である。

彼女のマンガは、少女マンガ特有の美しい繊細な絵柄を保ちつつ、話がキツくてめっちゃ面白いです、同業者にもファンが多い。そして、彼女は西荻窪に住んでいらっしやる。

私が西荻窪に仕事場を持つと思う

たのは、そのせいでと言うわけではないが、彼女からその地の便利さを聞いて、さらに決意を固めたムキはある。

何しろ、実家からそれほど遠くもなく、出版者には電車一本で行け、おいしい食べ物屋さんがうじゃうじゃあるという所なのである。

そして、近所には、コピー機の置いてある24時間営業のスーパーがあるというのだ。

私にとってはまさに理想の地である。そういうわけで、私は母と連れだって、西荻窪へ部屋探しに出かけたのであった。

いい年をして、親についてきてもらうというのは、少々抵抗があったが、実はこれは正解であった。

私は3LDKの部屋を捜していたのだが、その部屋を何人を使うのかと聞かれて、自分の顔を指さし、「私一人」

と答えると、誰もが怪訝な顔をするのだ。

三軒の不動産屋に行ったが、三軒とも同じ反応だった。

もし、親無しで一人で不動産屋に出かけていったら、もっと不審がられていたかもしれない。

ところで、3LDKというのは、あまり多くないらしく、西荻窪の不動産屋には、2、3件ずつしかなかった。

やっと見つけて見せてもらった3LDKの部屋も私の気に入るものではなかった。

私と母は喫茶店で休みながら、もう一軒だけ不動産屋をまわったら、今日はもう終わりにしよう、すぐに見つかるわけがないのだから、と話し合った。

その時私は「松苗さんのお部屋を見せていただく」ことを思いついた。松苗さんはマンションに仕事場を借りているのだ。

そうすれば、部屋捜しの参考にもなるし、それは、何よりも松苗さんの部屋に押しかけるいい口実になるのだ。

私は早速その喫茶店から松苗さんの所に電話をして、後一時間くらいしたらお部屋に伺わせてくださいと頼んだ。私はまだ松苗さんのマンションには行ったことがなかったので、道順もその時、聞いておいた。

さて、私と母はその日最後になる不動産屋へと向かった。

やはり、3部屋という物件は少なく、条件もあまり良くなかった。私はほとんどあきらめかけていた。

しかし、不動産屋の人が、2LDKだがとてもいい物件がある、と勧める部屋があったので、一応それを見るだけ見せてもらうことにした。

不動産屋の人の後にくっついて、とことこ歩いていくうちに、何だか奇妙な感じがしてきた。

この道は何かどこかで教えてもらったような気がする。

……松苗さんに教えてもらった松苗さんのマンションに行く道のりと非常に似ているのだ。

すると、松苗さんはこの近くに住んでいらっしやるのだ！

私は何だかウキウキした気分になって、不動産屋の人が指さすマンションへと入っていった。

もし、ここに決めたら、いつでも松苗さんの所へ行けそうだ。絶対、すごく近くに違いない。

私がぼーっとしていると不動産屋さんと母が先にエレベーターに乗り込んでしまい、私はあわててそこに駆け込もうとした。

その時、小走りに走る私の目のスミが何かを捕えた。

「松苗」
私は立ち止まって郵便受にとりつけ

られたその名をまじまじと見つめた。どう読んでもこれは「松苗」だ。

数時間後、予定より大分遅れて私は松苗さんの家のチャイムを鳴らした。

「部屋決めちゃいました」
「あら、ほんと？ どこ？」
私に「ー」と笑って、上を指さすと松苗さんの目がまんまるになった。

部屋が決まったことを早速、八巻さんに電話すると、「あら、良かったじゃない。その話、水牛に書けば？」と言われた。

私はこうして、仕事場と、原稿のネタと、そしてスニプの冷めない距離になった友人を一度に得たのであった。

山がない (1)

巻上公一

朝起きると山がない。ちょっとオーパーかもしれないが、いつもの見慣れた光景が一夜にして変化している時、その驚きはボカリとあいた心の穴のようなのだ。

母に訊くと、割合と落ちつきながら「そうなのよ、怖いわね」と言う。一種、諦めの心境らしい。なくなった山を元に戻せといっても不可能な話だ。

近くにテニスコート付きのリゾートが出来た事は、建築事務所をやっている友人から聞いてはいたが、まさか山がなくなるとは思いもよらなかった。

「もしかしたら、それは怪しいですね。ただ、大きな工事をする場合、どうしても法律にふれる部分が出てくるんで、普通、そういう場合住民のなにかしによって、知事がある部分だけといったりとかあるんですけどね」

「いやあ、回覧板もきやしないよ」
「だいたいテニスコートが出来る事自体、暗黙の了解事項で済まされているのだ。まるで、中曽根の三選が当り前になっていたり、国鉄の民営化が議会を通っているかのような、先に情報を操って、そうですね、やっぱりそのようになりましてねっていうのにそっくりだ。」

「ぼくはひどく憤りながらも、果して何をどうしたらいいのかさっぱりわからなくて、困っているだけなのだ。きっと、明日は道路がなくなると、その次家が壊されて、いきなり戦争が始まって、このままだと、まったく手の

だいたい、そう簡単に木を伐採できないはずなのだ。これは以前木こりをしていた父親が、当然ながら詳しい。

木を切るには法律があって、それなりの認可を受けなくてはならない。何故なら、やはり木は大地をささえているからなのだ、ぼくは思う。特に土砂がくずれやすい地質であったり、水が出る可能性が考えられるからだ。そのために、木を切る前に堰堤を作らなければならないし、水が流れるべきそれなりのほりが必要である事は、法律上決まっている事なのだそう。

「ぼくは、以前悪徳不動産業に従事していた男に電話をして、ずいぶんと問の抜けた質問をしたものだ。」

「ねえ、山が急になくなって怖いんだけど、どうしたらいいんだろうか」

男は答える。
「どういう認可を受けているか調べてみたらどうか？ 多分、標式があっ

出ない有様かもしれない。

「それが現代ってものよ」などとバカな観念野郎のひと言で片付けられてもかなわない。

このあたりには、〈市民運動〉とか〈住民自治〉とか叫んでいる人が、どこにひそんでいるのやら、見あたらな

い。
季節の頃は、そろそろ台風シーズンである。父や母によれば、なくなった山の上の部分にホテルが出来て、木を切った時、大水が出て、わが家が床上浸水し、土砂が流れ込んだ事があると

言う。

「本当に怖いよ」と父は言う。

「明日、一緒に現場を見に行こうか」

「うん」

さて、実際に見る山がなくなった現場は、山がなくなっただけではなかった。普通、山がなくなるためには、切

てそれに書いてあると思うから。で、おかしいようだったら、市役所に言うとか……」

「うん。ところがさ、市役所の支所の所長のところに、どうやらだいたいぶ前に親父が言いに行ったらしいんだ。そして、笑われたって言うんだよ。そればかりか、次の日に、親父が勤めている会社に地元の世話役みたいな人が来てさ。あれは大丈夫だからって言うんだ。何が大丈夫なものかって言い返したらしいけど。そして、工事関係者のような人が家にやってきて、母親にまあ、コレをってな感じで、何やら包み物を持ってきた。そんなものは受けとれないと追い返したそうだけど、それが果してカルピスだけだったのかどうかって、ちょっと疑問なわけよ。それに、なんで所長に言って、次の日にこんなヘンな反応があるのか、とても不思議な感じなんだよね」

った木や土砂を運ぶトラックがひんぱんにわが家の前を通らなくてはならないのだが、土や木を乗せたトラックなど見た事ないので、あら不思議。まるで大仕掛けの手の品のように思っていたが、ネタはばれた。実は、沢を埋めてしまったのである。なにやら、ますます怖くなった。

工事現場には立入禁止がいたるところに貼られている。

「最初に俺が見きた時は、立入禁止はなかったな。俺があの時いちゃもん付けたんで、あわててこんなもん貼りやがった」

「小さな堰堤が作りかけだね」

「作りかけじゃいけないんだがな。それに、いくら素人が見たって、あれでは小さ過ぎるだろう？」

「うん、確かに小さい」

現場には誰もいない。今日は工事はお休みなのだろうか。(つづく)

料理がすべて 田川律

(タイの料理は)

9月は、例年になく忙しく、8月の末にタイを訪れたことなど、もうずい分昔のことと思われるほど。六年前にインドを訪れた時、たまたま乗り次ぎの関係でタイで一夜を過して以来のことで、ほとんど初めて。それでもこのところ中目黒の「チャンタナ」や新宿の「バンタイ」に時折り行くし、タイへ行った友人からトム・ヤム・クンのスープの素を買ったりして、とてもは

が生きている。日本でも春菊からほうれん草にいたる青菜はけっこうあるのだが、都会ではとりわけこの頃こうした野菜から匂いが消えつつあって、タイでのような野趣がないみたい。

青菜のオムレツ。最近日本の新聞に出た「外国人ヌーディスト、大量に逮捕」で有名になったサムイ島、というのが、たぶんぼくがモンコンたちと訪れた島でないかと思うのだが、というのも、ぼくらのいる頃から、ひとりふたり白人の女や男が、スッ裸で泳いでいたから。その島はタイの東南部のラヨンから大型ボートで四十分ぐらいのところにある、島のあたり一面にバンガローが点在している。そのうちの二カ所に泊ったが、そのひとつで、この青菜のオムレツが出た。青菜といっても、すぐにしんなりしてしまうタイプではなく、むしろ、固い小さい葉の青菜で、それを卵でつないだ、いわばお

じめての国、という気がしなかった。おまけに、着いた次の日、ホテルへスラチャイとモンコンから電話がかかってきて、以後帰る時まで、ほとんどモンコンといっしょだったから、見知らぬ国の印象はいよいよ少なかった。

それにしても、十日間ほど滞在して日本食を食べたいとはついぞ思わなかった稀な国がタイ。屋台から、高級レストランまで、どこで何を食べても、ほとんど、外れ。なかった。

観察の結果、その理由のひとつは、タイ料理が意外にもあっさりしていることがあげられる。油を使い、ココナツ・ミルクも使うのに、不思議なことだ。どうやらそのワケは、素材に油をあまり含ませないようにするところにもある。つまり、蒸すことが主になっている。たとえばヤリイカに挽肉を詰めて蒸す。これを輪切りにしてそれにあのタイお得意の調味料をつけて食べ

好み焼のようなオムレツ。これにも、**「万能調味料」**をつけて食べる。

魚の寄せ鍋。旅の最後の日、モンコンは血膜炎にかかったように、目を赤くしているのにもかかわらず、お別れパーティを開いてくれた。タマサート大学の傍の河沿いにある内塗りの立派なレストラン。そこで不思議な寄せ鍋が出た。日本のタイ焼きの型の親玉のような鉄の鍋、にはぼすっぽりおさまるように、丸ごと揚げた（これは揚げてあった）魚を置き、そこにこれまたクレソンのオジサンのような青菜をのせ、キャベツの乱切りを加え、味噌汁のだしをたっぷりかけて、七輪のようなものにのせて、ぐつぐつわいてきたら、魚の身をむしって、汁につけ、キャベツやクレソンのオジサンを食べるのだ。

バンコックのオールド・ウェスト。モンコンの友だちがやっている店の名

る。タイお得意の調味料とは青くて小さい唐辛子、早い話がグリーン・チリを刻み、それにタイ風醤油ナンプラーと、青くて小さいレモン、これまた早い話がスタチ、を加えたもの。日本風といえば二杯酢に辛みをつけたものということになる。これは、食事の際の必需品で、屋台から中華料理屋にまで用意してある。それこそラーメンからご飯にまで好みに応じてかけたりするのだ。

ヤリイカだけでなく、魚も油で揚げるとは蒸す場合が多い。それでさっぱりした味になるのだ。

もうひとつ、タイ料理のうまさを支えているのが、多種多様な生野菜である。パクチー（中国ではインサイというらしい）という、セリとクレソンと三つ葉のかけ合わせたような野菜を中心に、じつに多くの野菜がある。いずれも、独特の香りを持っていて、それ

前がオールド・ウェスト。さしずめ北沢ロフトといった感じの店で、日曜の夜はカントリー・ウェスタンのライブをやっている。リーダー格のオニイさんは、糸山英太郎そっくり。この人が英語で「ジャンバラヤ」や「コットン・フィールド」や「カントリー・ホーム」をうたうのだから、ま、びっくりした。なんでタイまで来てカントリーを、と思わないでもなかったが、そんなこというたら、日本かて、ということになる。しかし、ヒルビリーっぽいものは、メロディとか声の出し方はタイの東北地方の民謡に似ているところもあるような気がした。

旅の最終日は、ここで、タイ生れのインド人、スワンさんにすっかり気に入られて、迫られて、しまっただいに焦ってしまった。男の人に迫られるなんて、はじめてのことで、それがタイで起ったのがおかしい。

〈トム・ヤム・クン・ニューメン〉

神戸・六甲山のふもとで、早速タイ料理応用篇をやった。買って帰ったスープレの素を使って、エビとマッシュルームとパクチーと、レモン・グラスと柑橘類の根を乾燥したものと、コブとを加えて、それに瀬戸内海の小豆島のおいしいソーメンを入れて「トム・ヤム・クン・ニューメン」を作った。9月のはじめでまだまだ暑かったが、太目のカメラマン北島謙三さんをはじめみんなに大喜びされた。

その後のニュースでは、この時のふもとの住人は、在日タイ人とどっかで知り合って、グリーン・チリやスープの素まで入手するほどになったとか。

なおこの時使った柑橘類の根は、東京・渋谷の東急地下食品店で、レモン・グラスなど香辛料を売ってるオニイさんから、物々交換で入手したものである。

〈オビヒロでの応用〉

勢いに乗って、今度は帯広でもタイ料理を作った。「ランチョ・エルパソ」の4周年記念のイベントの前日。店が定休日なので、打合せのあと、「トム・ヤム・クン」のスープと、イカ、エビをゆでて、万能調味料につけて食べるといふのをやった。店で働いている人の子供で7歳ぐらいの子供も、グワンプバッテ食べてくれた。あとでウチへ帰ってオトウチャンに「すっごく辛かったけどオイシクッタよ」とコーフンして報告していたという。久しぶりに大人数用調理器材の揃っている場でやったので、こちらもコーフンしてしまった。火力の強い大型コンロ、大きな鍋、広い調理場。水牛倶楽部もこんな風にしよう、などと勝手に考えながら大きなエビの皮をむいていた。なにしろ客が百人近く入れるレストランの調理場なんだから――。

〈トビ職のトーキング・ブルース〉

その帯広でひととき異彩を放っていたのがトビ職の竹内さん。イベントの二日目、大塚まさじのコンサートのあとで店でいつものようにワイワイ盛上っている時に、突然、清水一登さんのピアノ伴奏で、トーキング・ブルースをはじめた。なかなか達人なものでみんなに大受け。特に「クライだろ、クライだろ。だが、クライのどこが悪いか」というあたり、ご本人の性格びつたりで、トビ職といたってあんた、大工のトビでなく、飛行機の飛び、つまりパイロット。TDAの現職。だけど、「オモロイ人やけど、あの人の運転の飛行機には乗りたくない」というのがたいの人の意見。しかし案外こういう人、いったん操縦桿握ると、すっごくマジメだったりして。だけど話を聞いてみると、吹雪の帯広空港へ降りて、スチュアードから「今、機は

飛んでいるのですか、もう着地したんですか」と尋ねられたこともある、というから、ヤッパリ、コワイ？

〈野球のアンパイアと冷凍春巻〉

9月23日、千葉の浦安で、友だちのチームが、魚屋さんと野球するのにメンバーが足りないで出てくれないかと頼まれた。長いことやっけないけど高校時代は三年間毎朝ソフトボールをやったし、ま、員数合わせになるやろおもて参加したら、結構メンバーがいて、余ったのでアンパイアにまわることにした。そんなものしたことなかったけど、見よう見真似でやれると思って引受けた。ファウル・ボールだけわいから、キャッチャーからかなり離れ、いつでも身をかわせるようにへっぴり腰でやっていた。やってみると、「なんや、アンパイアで舞台監督やんけ」と思った。試合を仕切って進行させる役だ。ぼくの出来る仕事のひとつ

と共通しているもので、すっかり気が入ってしまった。もっともこの時のぼくの服装は、ピンクのタンク・トップの上に派手なアロハ。下は迷彩服のような模様だが色はラスターカーラーの半ズボン、というのだから、ピッチャーはさぞかし目がくららしたことだろう。いざ、アンパイアをやっていると、バッターが打ってくれるのが一番楽なのだが、ファウルが続くとボール・カウントを忘れがちになる。入った得点まで気がまわらなく、アウトの数とボール・カウントで精一杯。なかなかむづかしいもんじゃ。

それと、舞台監督となにより違うのは、ヤジられること。こんな草野球でも何人かの応援の女性が双方にいる。ボールくさい球を「ストライク」といったとたんに「ウッソー！」の大合唱をされてしまった。その分、やり甲斐もあるか、と思ったりして。

終って、双方がちょっと一杯、をやってる時、「アンパイア賞」というのを貰ってしまった。中トロ二本を冷凍したもの、これまたこの魚屋さん、というより魚屋さんとこで作っている冷凍春巻二十本。チームに入って選手として出てたら、こんな賞品貰えなかったと思うと、これからアンパイア専門で行こか、と思ったりして。

それにしても、この会社の冷凍庫はすごかった。時々テレビなんかで、冷凍庫に閉じ込められるシーンもあるがじっさいそこに入ると、こんなところへ閉じ込められたらホンマにコワイ、と思わせる迫力のある冷たさだった。

食用蛙の腿がカチンカチンになって箱詰されていた。レストラン用、といわれたが、そんなに食用蛙食べさせるレストランであつたかいな、と思うほど大量の食用蛙だった。

東北の神武たち・その後 鎌田慧

青森に出かけていってSクンに会うと、

「おれは別にカネが欲しくて自衛隊のクルマにぶつかっただんじやないよ」

と抗議された。抗議の内容よりも、青森の僻地(?)で「水牛」が読まれていることを知って、「へえ、どうして」と声をあげてしまったのである。

「水牛」のバックナンバーは十部ずつ保存しているのだが、整理が悪くて探しようがない。それで何月号に書いたのか、そしてどう表現したのかいま引用できないのだが、「東北の神武たち」と題して、青森県六ヶ所村の核再処理

工場の建設反対運動を担っている独身者たちについて書いた。

彼らはいまなお、いっこうに結婚する気配もみせず、それまでとおなじように村に通いつづけている、というよりは泊りこんでいる、といったほうが正確である。

だから、あえてその続編を書く必要もないのだが、Sクンの抗議には応えなければならぬ。彼が自衛隊員の運転するクルマにハネられたことを、わたしは反自衛隊闘争のひとつのチャンスのように書いたのだが、筆者のわたしとて、彼が意識的に相手のクルマにぶつかっただけだと主張しているわけではない。Sクンはけっしてそのような極左冒険主義者ではない。むしろ静かな自然愛好家で、わたしは彼の熱情にまけ、原野の奥深くはいり、あるいは崖によじのぼり、ザゼンソウやニコウキスゲなど、きいたこともない高山

植物をみせられて蒙をひらいたほどである。

まして、いまなお、自衛隊との交渉が永びいているのは、クルマでハネた加害者である自衛隊員が、後遺症でその後も苦しむことになる被害者のSクンに、「事故がわかると出世の妨げになるから、なんとか穏便に」との必死の表情に闘志をぶらせ、対外的に騒ぐに至らなかったことも災いしている。ソ連とでも戦争をしようという、北の護りの自衛隊員の考えているのが、隊内での出世だけという現実には、日本の平和を想えば好ましいとはいえず、なんとくだらないことであろうか。

クダンの自衛隊員は、妻の実家のある六ヶ所村から三沢の基地へと帰隊する途中で事故を起したのだ。このマイホーム主義者も、こずるいところがあって、言を左右して補償交渉から逃げまわっているらしい。なにしろ軍隊の反軍闘争を継続しつつあり、むつ市の原子力船「むつ」反対の団結小屋の住民であるHクンは、芝居の書割りで鍛えた技術で、核燃反対の看板づくりに精をだしている。

むつ市の独身者の長老は、齒科技師として「むつ」反対運動に火をつけた中村亮嗣さんで、悠々と絵を書き文章を書いて五〇代のひとり暮しを満喫している。むつ市のもうひとりの独身者は、今大量解雇にさらされている国鉄職員のHクンで、信号所勤務を終えるとそのまま乗用車で六ヶ所村にはいり、ここに泊ってまた出勤。自宅にはほとんど帰っていない。警官に検問されて免許証提示をもとめられても、二時間も拒否しつづけ、あわや逮捕、というまでがんばった強情者である。

電力会社が撤退するまで、彼らの無償の愛が成就することはないかもしれない。

とは、四一年前の沖縄での例のように「民間人」を守るためにあるのではなく、民間人を楯にして逃げまわるために高価な武器・弾薬を携行している存在であるのは明らかとはいえず、平常時でさえこうなのだから始末に負えない。この集団の論理が天皇主義的無責任性をもっぱらにしているものなので、個人もまたひき逃げの無責任をきめこもうとしているようなのだ。

さて、六ヶ所村の戦局だが、再処理工場反対の漁協組合長は、東京電力など九電力連合軍のクーデタによって突然解任され、カイライ政権がうちたてられた。それでも、県知事、村長が政治的に介入した漁協組合でも、おっかあたちと「神武たち」はよく動いて、カイライ組合長を引きずり降すことに成功した。

九電力は、海上保安庁の大型巡視艇など三〇数隻を動員し、陸上では警察

松崎町訪問記

伊豆の長 八美術館など 津野海太郎

1

伊豆の長八美術館は、ひとりで見にいこうと思っていた。ひとりで、というのは、設計者の石山修武といっしょにはなく、という意味である。

たくさんの写真や文章で、すでに私は、長八美術館がそうとうに派手な建造物であること、そして、その派手な建造物に（イッコの建物に託されるものとしては）でかすぎる（としか思えないような）夢が背負わされていることを知っていた。その派手さや夢の大きさにつりあうものを見つけることができればいいよ。でも、その可能性はたぶん五〇パーセントあるかないかだろう。もしなにも見つけられなかったとしたら、そのとき、おれは石山のまえで、いったいどういふ顔をしたらいいのさ。そう考えて、私は「ここだけ

は絶対にひとりで行くぞ」と、かたきころに決めていたのである。

伊豆の長八といっても、知らない人のほうがおおいだろう。

いばるわけではないが、私は知っていた。長八というのは江戸時代のすえから明治にかけて、伊豆松崎町を中心に活動した、大工でいえば左甚五郎みたいな伝説的な左官の名人である。コテをつかって描く漆喰レリーフ（コテ絵）によって名だかい。ただ、知っているとはいっても、私の知識はその程度の雑学にとどまり、そして、そんなことは知っても知らなくても、じつはどうでもいいのである。石山修武の知り方はそれとはちがう。おそるべきことに、かれにとつての「知」は、依然として「力」なのだ。私の知り方に代表されるような「知は無力なり」の風潮にさからって、かれは自分の知識を一氣に行動化してしまった。

いま左官や大工といった職人たちは、そのほとんどが建設会社や大工務店のもとに下請工として組織されている。

石山はこれをよくない傾向と考え、自分の建築を生きのこりの職人たちや地方の小工務店の手によって成立させようとしてきた。

でも、なかなかうまくいかない。そこでかれは、ふるい職人たちの技術や生き方の象徴として、伊豆の長八の記憶をよみがえらせようと考えた。

記憶しつづけるためには記憶術がいる。術を象徴化した空間がある。その空間を、日本の各地にちらばった独立自営の左官たちが自分の手で作る。さらに淡路島で瓦を焼いている山田修二とか、ガウディがのこしたサグドラ・ファミリア教会の建築現場で石彫りをしている外尾悦郎とかの、あたらしい職人たちがここにくわわる。

あてもないままに、石山はそういう

プランを発表し、まったく思いがけないことに、依田町長以下の松崎町の人々がそれにのって来た。

松崎町は人口一万。むかしは半農半漁の土地だったが、いまはおとろえておもな収入を観光にたよらなくてはならない。といて、日本のどこにでもあるような小さな町に、これといった観光用の目玉があるわけがない。そのとき、「いや、われわれには伊豆の長八さんがいる」と考えつき、それを石山修武というふしぎな建築家にむすびつけてしまったあたりには、この町の人たちがかくしもつ力量の大きさがしめされている。

つづいて日本左官業組合連合会の人たちが、この計画に加担した。こうして石山のもくろみどおり、日本全国から十数人の左官の達人たちがあつまり、かれらと地元左官たちとの共同作業によって、一九八四年の夏に美術館の

本館ができあがった。これは昨年吉田五十八賞を受賞している。

こうして伊豆の長八美術館は、ひとりの建築家と全国の左官たちと小さな港町の住人たち——それぞれのおもわくが複雑にくみあわさって、その微妙なバランスの上に出現してきた。さっき私が「一つの建造物に背負わせるには大きすぎる夢」と書いたのは、そういう意味である。写真で見ると、美術館の建物はとてつよく美しい。それだけに私は不安である。あのはかなげな風情をもつまっ白な建造物によって、おおぜいの人々がそこに託した夢やおもわくを、十分にささえきることができているのだろうか。その不安は、かれがこの夏に晶文社からだした「職人共和国だより・伊豆松崎町の冒険」という本を読んで、いっそう大きなものになった。

この本は傑作である。だからこそ私

は不安なのだ。こんな勢いのいい本に
対応するような魅力的な現実が本当に
存在するなどは、とうてい信じられ
ない。松崎町にいて、そのぜんぶが
夢みる建築家の大言壮語にすぎないと
判明したら、かれの友人であるところ
の編集者として、おれはどうしたらいい
んだよ。

2

夏休み返上の八月がおわり、九月に
はいつて暇ができた。さて、石山さん
には内緒で、こっそり長八美術館をた
ずねてみるか、と思いたったとたん、
その石山さんから電話がかかった。

「こんどの日曜か月曜、いっしょに松
崎にいきませんか？」

「あのですね、こんど美術館のまえに
鉄塔をたてるんですよ。もしよければ、

休日だというのに美術館で待ちかま
えていた依田町長は、私たちにむかっ
て、かれの田舎町観光論をとうとうと
ぶちまくった。温泉と酒と芸者の観光
はもう古い。松崎町は観光客のために
存在するのではない。まずこの町にし
かない文化のかたちをつくり、それに
よって町の人々が元気に暮らすことが
できるようなれば、おのずから、お
おぜいの観光客がこの町にあつまっ
てくるだろう。われわれが考えている二
十一世紀の観光とはそういうものなの
であり、そのための第一の布石が伊豆
の長八美術館なのだ……。

この夢みる老町長の長口説を、夢み
る建築家のほうは「いい加減ききあき
ましたぜ」という顔をしてきいていた
が、私にとっては新鮮だった。

第一というからは、第二、第三が
ある。月四回の「のれんの日」に、美
術館にちかい商店街の店々が、屋号と

いっしょにどうですか？」

で、結局、いっしょに行くことにな
った。なんであれ、そして、だれであ
れ、かたい決意などというやつは、実
際には、その程度のかたさしかもちえ
ないのだ。

九月十五日。月曜。朝十時半に東京
駅でまちあわせ、新幹線の三島からタ
クシーで沼津港、そこから雨にけぶる
伊豆半島の西海岸ぞいに高速船で約八
十分、半島の突端にちかい松崎町につ
く。港には町役場の青年が傘をもって
むかえにきてくれていた。そのまま車
で美術館にむかう。中央にすでに完成
した本館、その右が野外劇場、左手に
十一月に完成予定の別館（レストラン
と売店）——石山さんがいっていた鉄
塔（ななめになったエッフェル塔が二
本）というのは、その別館のまえに立
つことになっているのだ。

長八美術館は、予想していたより無

家紋を染めぬいたのれんを、いっせいに
店先にかざる。それが第二——のれ
んをデザインをしたのが平野甲賀だど
いうのだから、おそれいる。

第三、岩地という海ぞいの小集落の
カラー・コントロール計画。ここには
海水浴客めあての民宿がおおい。その
一軒一軒を、屋根はウコン色、庇や戸
袋はクチナシ色、樋や手すりにはリキ
ウ白茶——と、とくべつに発注した三
とおりの黄色いペンキで塗りわけら
れ、それによってトタンと新建材の安手な
家々が、あざやかによみがえった。い
きおいにのって、民宿の看板まで、平
野ふうの書き文字になっているのがお
かしい。

この集落の老人たちは、かつて生糸
の貿易船にのりくんで、しばしばアメ
リカにわたっていた。そのころ海上か
ら見た異国の港町の眺めが記憶にのこ
っていて、ああいう眺めがここで再現

邪気な、たのしい建物だった。

いま私たちは漆喰の壁のえげつない
ほどの白さを忘れて生きているから、
ふいにそれになつかると、そのことだ
けであわてふためく。あまりにも徹底
的に白すぎて、それがスキヤンダラス
なものに感じられてしまうのだ——と
いうような点はいろいろある。そうし
たえげつなさや俗っぽさを抱えこんだ
まま、この美術館は、たのしく洗練さ
れた「芸能建築」になっていると私は
感じた。その芸能性をこのむ人もいれ
ば、頭から拒絶してしまう人もいるだ
ろう。それは当然のことだ。つまり、
どうでもいいことだ。

それよりも、もっと肝心なことがあ
る。それは、この美術館が町の生活か
ら孤立した観光名所として発想された
のではない、ということである。石山
さんの本は、ただの大言壮語ではなか
った。いや、それどころではない。

できるのならば、まずかれらがこの計
画に積極的になったらしい。発案者は
町長、色彩をきめたのは石山だが、屋
根や壁に実際に色を塗ったのは、この
老人たちだった。往年の船乗りだから、
塗装はお手のものなのである。

さらに第四、第五、第六……と、依
田・石山コンビが打った布石は他にも
いろいろあるのだが、いまはふれる余
裕がない。

長八美術館はこれら諸計画の中心に
あって、その全体を元気づける役目を
はたしている。石山修武といっしょに
いってよかった。おかげで私も元気に
なった。十一月開場のレストランでは、
土地の魚介類やシイタケをつかった変
則の地中海料理を食わせてくれる。食
プランナーとして、林のり子さんがひ
きこまれつつあるのだとか。じつにな
んともワッハッハ！ である。そのう
ち、いっしょにどうですか？

「カフカ」 ノート 高橋悠治

9月19日、コンサート「夜の時間」の反省。

まず、プログラムについて。シューマンとブゾーニの音楽は、夜と幻想にちなむものを選んだが、プログラムをそれらではじめたのはよくなかった。コンサートをやると、クラシックのあたりらしい解釈を期待してくる人たちがかならずいる。つい、それに負けてサ―ビスする気になってしまふ。

たしかに、シューマンもブゾーニもおもしろいとおもうが、それらをおたらしくやってみようとか、まして紹介しようなどと一瞬でもおもってしま

ブゾーニとかれの音楽の間にも言えるだろう。

ピアノという楽器。どうしても音の粒がそろって速くなっていく。三宅榛名の弾いた「トロイメライ」のテーブをききながら、このように自分の楽器としてピアノをあつかうことができるという、とおもったが、じっさいに弾いてみると、ピアノの演奏法から自由になるためには、きびしい抑制が必要だった。あぶなっかしい指のうごきが全身を空中でささえている、という感じ。速度をおとしつづけて、たおれる寸前までおそくした自転車にのっている感じ。そこではじめて、ほとんど重さのない音のほのかなかげりにたどりつく。だが、そこでとまったのでは、それもひとつの技術にすぎない。

ソロのばあいは、とくに危険だ。技術だけを見て、そのむこうにすけて見えるはずのものが見えなくなる。

ったのは、よけいなことだった。かれらの音楽からプログラムのほかの部分へいくつかの線が走っている。シューマンからカフカにいたる線――

のびあがり、まるくなってねむりこむねこのうごき、階段をかけあがり、ころげおちるちいさな機械、とんとんとたたくリズム。浅田彰の「ヘルメスの音楽」が紹介するロラン・バルトのシューマン論にすべて書かれていることだ。ただし、そこから読みとれる音楽はもうシューマンのものではない。それは、バルトのことばからもはみだし

てしまふ。
ブゾーニから三宅榛名にいたる線はどうか。たえずかたちを変え、すこしづつずらされ、断層と乱反射によって知らないうちにまがっていく意識の流れ、さまざまな音階のなかをくぐりぬけ、単純な線でありつづけながら、線としては見えないほどに全体のほかし

1人で音楽をやっているのは、経済のしくみにしばられているからだ。何人かでいっしょにやれば、とくに技術もいらぬことを、1人が機械のたすけをかりてやってしまう。この方向でいけば、技術がせんれんされ、きわだってくるうちに、音楽は個人的スタイルとして、時代の文化の一部になっていく。もちはこぶこともできるし、費用から言えば効率がいい、ということ

はどのくらい利点なのだろうか。
いま、機械を協同作業でおきかえることも、もともとのありかたにちかづくことにはならない。水牛楽団がそうだったように、生活のためにほかのことをしながら、できる時だけやる音楽では、セラピーにすぎないし、それで生活しようとおもえば、スタイルを売ることになって、技術的競争にまきこまれるのだ。それに協同作業といっても、原則をもつことで、すでに作曲家

のなかにとけている。これは、じっさいにそうあるというよりは、そこにある音楽に投影されている音楽の夢かもしれない。

シューマンやブゾーニの音楽から何かを読みとることもできるし、それをほかの音楽につなげることもできる。だが、そこで見えてくることは、シューマンやブゾーニを演奏することで、また見えなくなってしまうのではないか、と疑ってみる。

ヨーロッパ音楽文化やピアノの演奏法が立ちふさがっている。バルトの言う「第三の意味」だって演奏の意味づけにすぎない。その限りでは、見たいものをおかしてそこに投影しているだけだ。バルトがシューマンに見ているようなものを、バルトのつかうことばから出発して音楽としてつくってみれば、それはシューマンどころか、ヨーロッパ音楽でさえない。おなじことが

と演奏家の関係がそこに生まれ、グループとして自立すれば、ますますそれがつよめられる。

どこまでいっても解決はない。どこかでバランスをとらなければいけないが、第一、矛盾を解決して単純化しようとすること自体、かなり破壊的ではないだろうか。

「カフカ」でたしかめたこと。ピアノ全体をつかっていることにくらべて、たった4つの音をつかっていることの方が、どんなに自由であることか。ふくぎつな16ビートのノリより、1ビートの不正確さの方が、どれほどからだにとって衝撃的か。

一九六四年ベルリンから、自分のやってきたことをふりかえてみると、こんなにかんたんなことがわかるだけに、ほとんど一生の半分以上かかるのだ。カフカの断食芸人のかなしみが、ほとんど手にとれるようだ。

走る・その九 デイヴィッド グッドマン

ヤエルは二日だけウエストヴェー小学校に通った。三日めから教師たちはストライキに突入した。

ストライキは三週間つづいた。その間ヤエルは毎日YMCAに通って、泳いだり、映画を観たり、ゲームをした。夏休みと変わらない日々を過ごした。

学校がストライキでも、日本語のレッスンは怠らなかつた。毎週月曜日と木曜日の午後四時から五時まで木下先生が日本語を教えてくれる。だからその宿題をやっておかなければならない。

出来事を報道している。だが、だれも観ていないので、すでにニュースを観たばかりはテレビを消してしまふ。

シャワーして、髭を剃って、洋服を着る。姉にいじめられて泣いているカイトを慰めて、「嘘！ だって、あたし・・・」と抗議するヤエルを宥める。そして二人をつれて一階に下りる。お母さんがシャワーを浴びている間に、ぼくは朝食を出す。といっても、ぼくは炭水化物の係である。蛋白質や果物（バナナ以外は）の食べたい者は、お母さんが下りてくるまで待つ。ホットケーキ、ドライシリアル、オートミール、トースト、豊富なメニューだが、ぼくの担当は炭水化物のみである。

食事が終わると勉強の時間。居間にいて、ラヴシートと呼ばれる長椅子にヤエルを座らせて自分も腰を下ろす。はばがせまくて、身体を寄せなければならぬのでラヴシートというの

たとえば、日記を書くという宿題。

ヤエルはある日、日記の代わりに、神官前小学校の友達宛てに手紙を綴った。「りえちゃんげんきですか。りえちゃんのおかあさんもおげんきですか。いまがっこうはやすみです。やえるはまいにちぶるにはいつてたのしんていませう。さようなら」

YMCAに出かける前に勉強させておかなければ、ヤエルはその日は勉強しない。彼女が「サムリッチ」と呼ぶサンドイッチ弁当をもって八時半に家を出るので、朝は忙しい。お母さんが「サムリッチ」の用意をし、カイの世話をしている間、ぼくはヤエルに日本語を勉強させる。

ヤエルの八時半の出発に間に合うためには、走る予定の朝は、ぼくは五時半に起床する。タイマーをしかけておいたコーヒーマーカーのポットに、芳ばしい救命液が、目をこすりながら階

だが、長期的に考えれば、教える具体的な内容よりも、父親の身体の温もりを感じながら勉強するという毎朝のスキンスリップのほうがいいか、重要なかもしれない、と思うことがある。

ヤエルは素直に指導を受ける、というわけではけっしてない。活動過多児かとさえ思わせるほど、ばたばたと落ちて着かない。

「さあ、勉強しようね」
「いやだ」
「毎日少しずつ勉強しなければだめだよ」

「でもきょうは疲れてる」
「ゆうべ寝ないで遅くまで遊んでたからだだよ。ちゃんと寝てくれば、朝は眠くない」

「わかった」
「じゃ、いいね？」
「待って、クマがいない」
「しょうがないね、早くつれといで」

段を下りてくるぼくを待っている。二杯の水（一リットル弱）をごくごく飲んで、それからコーヒをすすりながら早朝のテレビニュースを観る。便意をもよおすと、脱糞。それから準備体操をして、運動靴を履いて、出かける。

六時半ごろ和子も起きる。時計付きラジオからロックンロールの音がかん響いてくるからである。ぼくがミニ・ホットプレートに載せておいた一杯のコーヒを飲んで、和子も次第によみがえる。ぼくが帰ってくるころには、彼女は、祖父の形見であるベルンヤ絨毯に座って、ヨーガをしている。ヤエルはクマという名のぬいぐるみにスカートをはかせ、カイはびしょぬれの紙おむつを一生懸命に一人で脱ぎ落とって頭張っている。テレビはコカインで死んだバスケットの選手のニュース、その日のテロ事件のニュースなど、今日のアメリカの想像力を雄弁に物語る

「どこにいるかわからないもん」
「早く探してこいよ。ゆうべ一緒に寝たんだらう？」

「そうだ！」ヤエルは飛び上がると、側転を二回して、自分の寝室からクマをつれてくる。
「じゃ、『にんじんやま』の話のつぎだね。どこまで読んだっけ？」

「きらい、その話」
「このへんだね。よくばりのおじいさんが出てくるところから」

「きらい、きらい」
「そんなこといって。ほら、あと少しだから、いまがんばって読めば、明日からもっとおもしろい本が読めるじゃない。さあ、読んで」

ぼろぼろ涙をこぼしつつ、ヤエルは大声をあげてわめく。ぼくも怒鳴る。きょうはお手上だ。五時半に起きる甲斐は結局なかったのかな。

編集後記

ナムジュン・バイクの「バイバイ・キプリング」のためにTV局にきてみると、たくさんの人がいそがしくはたらず、連絡もうまくとれないために、予定はほとんどおくれでいった。それがあたりまえなのだった。そこに呼びだされた芸術家たちは、一分間出演するために何時間も待っていた。その一分間は無意味な行為のこまぎれにしか見えなかった。アメリカから衛星中継でルー・リードがうたっていた、60年代とおなじ革ジャンを着て、自分のうたをうたいつづけていた。それだけが意味ありげに見えた唯一の行為だった。そのほかは、切り刻まれたがらくたの堆積の間をはねまわるいなくさい漫

オコンビのわるふざけで、こういうものがいまの日本文化なのだった。これが平均水準であることに誇りさえもっているナショナルリズムが、日本をおいはじめている。それを当然と感じはじめている自分をふりかえっても、あらためて、それは寒気のする光景だった。この廢墟の上をバイクのビデオ・ボールがかるやかに舞いすぎていく。風景が回転し、ゆがんでボールに吸いこまれていく。このエレガンスも、虚像であるだけ一層うつくしい。それが終わると、アークヒルズに立っているバイク、「あーあ」と嘆息して幕とまった。

こう書いてみると、未来の悪夢はもう現在のものだった。沈みかけている文化は救いようがなく、毒がまわらないうちに逃げだすほかはない、と思われた。だが、どこへ？ ちがう空間、ちがう時間、ちがう文化？ (高橋)

* 予約購読の申し込みと送金は郵便振替を利用してください。

口座名 水牛編集委員会
口座番号 東京四一九一七九二
購読料 一年分三〇〇〇円(送料共)
住所、氏名、電話番号、何号からと明記。

* 本誌は次の書店にあります。

- 模索舎(新宿) ☎三五二一三五七
- ブックイン(阿佐谷) ☎三三三〇一七八九七
- 信愛書店(西荻窪) ☎三三三三〇四九六一
- ワンラブブックス(下北沢) ☎四一一一八三〇二
- アール・ヴィヴァン(西武池袋店12F)
- カンカンポア(西武渋谷店B館B1)
- ストアデイズ(六本木ウエイブ4F)
- 名古屋ウニタ書店 ☎七三二一一三八〇

水牛通信 第八巻第十号 一九八六年
十月十日 定価二〇〇円 発行人 堀田正彦 発行所 水牛編集委員会 ☎54
東京都世田谷区新町2-15-3 八巻方
電話〇三(四二五) 九六五八 振替口座
東京四一九一七九二 印刷所 佛トライ
プリントショップ